



の預言者の口で偽りを言う霊となります。』すると、『あなたはきっと惑わすことができよう。出て行って、そのとおりにせよ。』と仰せられました。」その霊は人格化されて、「私」となっていますが、それ以外に表現する言葉がないからです。その霊は、自分が預言者のなかに入って、偽りを語らせるといいます。偽りの霊となると申し出たのです。主は「出て行ってその通りにせよ」と仰せられました。

③すべての預言者の口に (23) 『今、ご覧のとおり、主はここにいるあなたのすべての預言者の口に偽りを言う霊を授けられました。主はあなたに下るわざわいを告げられたのです。』額面通りに読めば、主ご自身が 400 人もの御用預言者達の口に偽りを言う霊を授けられたということです。試しの霊ぐらいと読みましょう。その霊は、アハブにラモテ・ギルアデに行くことを告げているわけです。それは、アハブ自身も願っていることでした。しかし、最後の部分で、皮肉にもそれに反対のことを言うミカヤの言う通りにすれば助かるのに、多くの預言者が言う通りにすれば、災いがアハブにもたらされることになると告げているのです。

### 3. 本当の預言を退けたアハブ (24~28)

①ミカヤの頬を (24~25) 「すると、ケナアナの子ゼデキヤが近寄って来て、ミカヤの頬をなぐりつけて言った。『どのようにして、主の霊が私を離れて行き、おまえに語ったというのか。』ミカヤは答えて、『いまに、あなたが奥の間に入って身を隠すときに、思い知るであろう。』非難された側も黙っていません。400 人の預言者たちの代表と言っても良い、ケナアテの子ゼデキヤは、ミカヤの所にきて彼に殴りかかります。そして、ミカヤに言ったのです。「お前は主の霊が、私を離れて行き、おまえに語ったというのか！ うぬぼれるのではない！」といたいところでしょう。ミカヤは殴られても冷静に告げました。「やがて私が言うことが実現して、あなたは身を隠し、そのときに私が言ったことが本当であったと理解するでしょう」。

②この男を獄屋に (26~27) 「すると、イスラエルの王は言った。『ミカヤを連れて行け。町のつかさアモンと王の子ヨアシュのもとに下らせよ。王が（この男を獄屋に入れ、私が無事に帰って来るまで、わずかなパンと、わずかな水をあてがっておけ）と言え。』」これらの事を聞いていたイスラエルの王アハブは怒り心頭です。自分の身に不穏なことが起きることを預言するミカヤについて黙っていらなかったのです。そして、「ミカヤを連れて行け。投獄の働きをしていた、町の司であるアモンと、王の子であるヨアシュにその働きをさせよと叫びました。さらに、この男を投獄せよ。与えるのはわずかなパンと水だけだ！ ミカヤの預言はずれ、自分は無事に帰ってくると言っているのです。

③ミカヤの確信 (28) 「ミカヤは言った。『万が一、あなたが無事に帰って来られることがあるなら、主は私によって語られなかったのです。』そして、『みなの人々よ。聞いておきなさい。』と言った。」ミカヤは王を恐れることなく、万が一にも王が無事に帰って来られるとするなら、確かに主は私に正しいことを語られなかったのでしょうかと述べ、アハブが無事には帰れないことを確信していたのです。でも、そして、ミカヤは自分が伝えたことをよく聞いておいてくださいと述べました。それほどに、アハブが出ていくなれば、命がとられるという確信をもっていたのです。

#### 《結論》

不信仰の王なのに憐みをかけられた人。イスラエル王アハブは妻イゼベルにそそのかされとはいえ、偶像神バアルにうつつを抜かし、神に背を向けて歩きました。その評価は「アハブのように、裏切って主の目の前に悪を行った者は誰もいなかった」(21:25) というものでした。義なる神からの裁きがいつ下ってもおかしくない状態でした。ところが、北のアラムから攻められた時にも、劣勢の中を勝利させられました。ぶどう園の主ナボテをイゼベルの力を借りて、石打ちの刑にしてみました。彼は裁きを告げられ打ちしおれましたが、主は「あなたはアハブがわたしの前にへりくだっているのを見たか」とエリヤに告げられて、裁きは見送られているのです。

アハブのもとには、バアルの預言者や御用預言者もたくさんいて、彼の不信仰を助長していましたが、一方でエリヤや、今朝読んでいるイムラの子ミカヤのように、信仰によってまっすぐと神の言葉を語る本物の預言者も送られていました。アハブにとっては好ましくない、直言する預言者たちでした。しかし、考えてみると、そのような本物の預言者がアハブのところに、送られていたことは、霊的側面から見れば恵みでした。神からの悔い改めの機会を与えられていたことになるのですから。

そして、今回はゼデキヤを始めとする 400 人の御用預言者たちが、ラモテ・ギルアデに行くことを勧めたのに対し、預言者ミカヤがそれを止めました。ミカヤはゼデキヤに殴られ、アハブから獄屋に入れられるという迫害を受けますが、そうなることをも覚悟のうえで、命を張って諫めているのに、アハブはこれを退けてしまいました。ここに至るまでには、天上において、神御自身が霊によびかけて、御用預言者達に働きかけるなかで、最後のチャンスとしてのミカヤの預言が用意されました。しかし、アハブはついに、その預言に耳を貸しませんでした。

私たちが日々歩むなかで、ここまで霊的命を守られ、生かされていることに感謝しましょう。今私たちが支えられているのは、

神の大変な御忍耐と憐みをもって見守ってくださっているからです。アハブが立ち返るのを、主は待っていてくださいました。それでは、私たちはどうでしょうか。主は私たちにも、ミカヤのようなメッセージを送ってくださっているかもしれません。主が私たちをためられていることもあるかもしれません。しかし、必ず正しい方向への声を与えられていると考えられます。私たちに、真理の言葉に心を向けようとする信仰の覚悟があるかが問われています。「この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か。すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。」(ローマ12:2/2017年版新改訳)とあります。主に自分を変えていただき、正しいことを見分けることできる霊性を備えていただいきたいのです。祈りのうちに主の御声を、御言葉を通して聞きたいのです。進むべき道を示していただきたいのです。「狭い門を通過して」(マタイ7:13)、主の祝福にあずかりたいものです。